

# 立身出世を求める青年たち<sup>1)</sup>

——「風俗小説」張文環新論——

張 文 薫

(要約)

日本統治期における最も重要な日本語作家の一人であり、雑誌『台灣文學』(1941—1943)を主宰した張文環(1909—1978)の文学は、長い間もっぱら「風俗小説」として評価されており、その作品に備わる他の様相は見落とされてきたとは言わざるを得ない。本論文は從来中国語訳の欠落や原載紙誌の不完全な保存状態のために、注目されていなかった「落葉」、「父の要求」、「山茶花」、「地方生活」、「土の匂ひ」などを、学校教育を通じて立身出世を求める青年を主役とする一つの作品群としてとらえ、小説に現れた青年像とその周辺の変化を追ながら、張文環自身をも含む当時の台湾知識人が直面した精神の葛藤を明らかにせんと試みるものである。その中でもとくに張文環小説の大きな特徴とされる故郷と女性に関する描写の変化を主人公の心境の変遷と対照させて考察し、近代文明を体験した知識人の都市／田舎に対するコンプレックスに注目することにより、張文環作品解読のための足がかりを得たいと考えている。

## はじめに 「風俗小説」について

張文環について語る際、「風俗小説」という評価がいわば定説となっている。その代表として、1991年台湾前衛出版社が戦前、戦後における活躍する台湾作家の作品を『台灣作家全集』<sup>2)</sup>として、全50冊を出版した際、『張文環集』のサブタイトルはまさに「人道關懷的風俗画」であったことを挙げられよう。台湾文学研究の經典ともいえる葉石涛の『台灣文學史綱』も、張文環文学に関しては「台灣民衆の四季の風俗や習慣についての描写を通して、彼らの民族的伝統生活を活写」<sup>3)</sup>すると記述している。このような評価は戦前まで遡ることができる。管見の限り、藤野雄士『『夜猿』その他・雜談』<sup>4)</sup>はその最初の例である。

張文環の『夜猿』その他、氏の最近の作品が、風俗小説に墮してゐるとか、ゐないとか、さういう小説論での末梢的な、しかも甚だ座興的な問題を論じることには今のところ興味がない。

その語り口から察せられるように、張文環に「風俗小説」という評語を最初につけたのは、決して藤野ではない。しかし、「風俗」の語義は日本語と中国語との間に、微妙なズレが存在しているにもかかわらず、戦前日本語による評価を戦後においてそのまま援用することの適切さについては検討の余地があるのではないだろうか。さらに、張文環とは親交がある藤野が「風俗小説」に対していささかな不満を漏らしたように、戦前において「風俗作家」と称されることは必ずしもプラス評価ではなかった。

さらに、「風俗小説」という評語は日本の『人民文庫』の作家、特に武田麟太郎を評する際よ

く使われた言葉である。それと張文環の日本留学時代の左翼運動歴、及び『人民文庫』派の平林彪吾<sup>5)</sup>、武田麟太郎<sup>6)</sup>との交遊、彼らから創作上の指導を受けた経験を合わせて考えると、「風俗小説」という評語は、張文環と『人民文庫』とのつながりを暗示している可能性も否定できない。こうした張文環をはじめとするリアリズムを信奉した『台湾文学』グループが、1943年に対立側の『文芸台湾』に「糞リアリズム」と批判され、台湾文学史でも有名な「糞リアリズム論争」が起きた。垂水千恵氏が指摘するように、1943年の「糞リアリズム」論争は「1930年代に遡り、プロレタリア文学運動崩壊以降の二つの異なる方向性（『日本浪漫派』と『人民文庫』）を継承した『文芸台湾』派と『台湾文学』派との対立として捉える」<sup>7)</sup>こともできる。こうした文脈から見ても、戦後の台湾文学研究において張文環に対し「風俗小説」（=人情風俗をよく描写する小説）の評価を与え続けるのは単純化に陥る危険性があるといえよう。この問題に対する考察は別稿に譲るが、本稿はこのような「風俗小説」の評語では捉えきれない張文環的一面を探りたい。そのために、張文環作品の中でも風俗描写の比重が少ない、そして高等教育を受ける青年を主人公とする作品「落葉」、「父の要求」、「山茶花」、「地方生活」、「土の匂ひ」などを一つのシリーズと考えて、張文環の創作意図を検討していきたい。

## 第1節 立身出世の魅力

『台湾新文学』創刊号（1935年12月28日）に発表された張文環小説「過重」の中に、次のような一節がある：

学校の前へ来ると健はときどき帽子を脱がなければならなかつた。先生の肩にはしゃもぢ型のやうな金モールの肩章がちかちかと陽射しを受けて光つてゐる。サーベルも金ぴかでちかちかしてゐる。…先生も何時か教壇で云つたやうに、そしてサーベルを指し乍がら、「これですよ、勉強してゐるものは、判任官ですよ」

健はその話がいつまでも頭にこびりついて、出来れば師範学校を受けて見たいと思った。ああ出世、錦を飾つて故郷へ帰れる日…（中略）金モール、金すぢ、健は息を殺し乍ら天秤棒を辻らさないやうに帽子を脱ると金モールをつけた陳先生に最敬礼をした。（傍点：筆者。以下同じ）。

町から遠く離れた山中に母親、弟と三人家族で暮らしている少年健が、祝祭日の旗日に学校の祭典を見に行きたかったものの許されず、母親の手伝いのためにバナナを背負って学校の前を通った際、先生と出会う時の光景である。台湾文学研究者の游勝冠は「台湾命運的深情凝視—論張文環的小説及其藝術」（「台湾文学研討会」論文、1995/11/4, 5、原文中文）において、ここの金モールやサーベルを「植民地政権が人心を買収しようするために」作ったものにして、「植民地における皇民化教育に感化された健は、植民地政権が施すその『栄光』の背後に台湾人を支配する意図が潜んでいることを見通せなかった」のは明白であると最初に健の心境を分析し、その後健は母親と農産物の税務員との喧嘩に驚かされて、自分たちは「植民地人民として圧迫されている

こと」に気づき、ついに「健の心中の栄光も崩壊した」と小説の起承転結を分析する<sup>8)</sup>。游論文は「過重」、「芸姫の家」、「夜猿」、「闇鶏」などの作品に潜んでいる張文環の反植民、反封建意識を強調することに重心を置いている。しかし張文環の全小説を通讀すれば、「金モール」「金サーベル」は「過重」のみでなく、「父の要求」、「二人の花嫁」、「山茶花」、「闇鶏」、「地方生活」、ないし戦後の『地に這うもの』に中にも登場することが理解できよう。張文環の作品において常用される金モールや金サーベルは、果たして単に支配者が被支配者の台湾人を買収するために作ったものとしての象徴的意味を持っているだけなのであろうか。そして台湾人の「判任官」<sup>9)</sup>になりたいという欲望は、単純に植民地政府に騙された結果によるものといい切れるのであろうか。日本統治期における台湾人にとって社会地位の象徴といえる金モールや金サーベルを、植民政による人心買収手段という側面のみに限定し、張文環の作品はそれへの反感を語っている点に価値があると評価するのはいささか安易ではあるまいか。金モールや金サーベルは支配者が被支配者をごまかすアメであるばかりでなく、当時の台湾青年そして日本青年までが教育を通じて社会的地位の上昇移動を果たそうとする際の目標でもあり得たのではなかつたろうか。そして張文環の主人公たちも、金のモールやサーベルをわが手に収めようとして上級学校へと進学しているのではあるまいか。

まずは植民地台湾社会における立身出世の意味するものを検討して行きたい。

儒教思想圏に置かれている台湾社会は、清代中葉から科挙制度を通じて伝統中国の人材抜擢体系に収められた。科挙に合格した人間は社会のリーダ格であるという観念は、日本統治期に入る前の台湾社会においてすでに一般化している。ところが日清戦争の清朝敗北により1895年に日本の植民地となって以後の台湾では、科挙を通じて立身出世を遂げるという夢は消え、その一方で植民地政府の手によって施された学校教育により、新しい道が開かれたのである。

台湾の学校教育は、1895年台湾を占領してまもなく設立された芝山巖国語伝習所から始まり、そして1919年まで各地に中学校や高等女学校、職業学校が相繼いで開設された。しかしその目的とは「台湾人を近代産業の労働者や下級官吏、中堅技術者として育成する」<sup>10)</sup>ことにあった。その例としては、1919年に至るまで実業界用の人材育成のための学校が設けられていたものの、高等教育と言えるものは統治上有用な国語教育のための師範学校や医学専門学校に限られていたことを指摘できよう。台北高校は1922年、台北帝国大学は1928年に成立したが、志望者は毎年三桁<sup>11)</sup>の定員数に遙かに及ばなかった。台湾青年にとって、島内で高等教育を受ける機会には制限があった。しかし、日本本土にさえ行けば、学力により高等教育をうけ、さらに社会的地位上昇も可能であった。

ところで知識の習得を通じて立身出世をしようとする植民地青年たちにとって、成功とは具体的にどのような職業に就くことであったのであろうか？本島人という立場上、青年達はどんなに優れた人材であっても政界の指導層に入るのはほぼ不可能と考えられていたので、立身出世の理想は政府機関の役人として働くことであった。かくして学問を身に付け学校など官庁に就職する人々が、当時のあこがれの対象となつた<sup>12)</sup>。ちなみに台湾人としてはじめて普通文官試験に合格し（明治38年）日本の官吏資格を得てから、裁判所書記官になった頼雨若は、まさに張文環

と同郷の嘉義出身なのである。頼雨若は後に書記官を辞めてから明治大学に留学し台湾最初の法學修士となり、帰台後は弁護士として総督府に「州協議会会員」として選ばれたのである<sup>13)</sup>。台湾人としての出世の頂点を極めた頼雨若の例に奮起させられた同郷の青年たちは相続いで日本や外国に学問を求めるようになったと『嘉義県志』<sup>14)</sup>は記している。張文環自身も頼雨若の跡を継いで立身出世の道を歩き出した青年たちの中の一人であったといえよう。

## 台湾の名門校—台北高校

学問を通じて社会地位の上昇を達成しようとするのは当時の日本と台湾とを問わず、青年たちの抱く憧憬であったことはすでに言及した。それでは立身出世コースを辿ろうと決意した台湾青年に対して、高等教育というのはなんであったのだろうか。本稿で論じる作品の中で、高等教育を受ける青年の前史と見られる「落蓄」を除いて、他の4作の主人公の学歴を具体的に見ればある共通性が見て取れる。それは、「台北高校」というブランド校の存在である。「父の要求」の主人公である陳有義、「山茶花」の主人公である賢、及び「土の匂ひ」の主人公である吳清輝、これららの東京留学の道を辿った田舎出身の青年たちは（「田舎」とは張文環自身の言葉であり、「都会」と対照される場として使われている。本稿は張文環の使い方に従って、以下括弧をはずして用いることにする）、例外なく皆台北高校の卒業生として設定されている。「地方生活」の主人公である澤についてはその高校名が具体的に説明されていないが、彼もまた台北高校生であった可能性を否定できない。以下では植民地台湾において「台北高校」の象徴する意味を考察しながら、張文環自身的学歴と合わせてみるとことにより、こういう設定を仕掛けた張の意図を検討したいと思う。

日本植民時代に台湾における高校は、台湾総督府台北高等学校（以下「台北高校」と略称）と台北帝国大学予科（以下「帝大予科」と略称）の二校しかなかった。しかも「台北高校」<sup>15)</sup>が1922年に設立されたのに対し、「帝大予科」は1941年と遅く、後者が開校するまで植民地台湾には一つの高校しかなかったことになる。台北高校は終戦まで日本全国に35校存在した旧制高校の一つで、尋常科と高等科を併せもつ七年制の高校であり、当時「開放的で高い知的雰囲気をもった校風として『台湾における自由主義のメッカ』」<sup>16)</sup>と評されていた。毎年東大や京大など内地の高等教育機関へ進学する人数は卒業生の中でも大きな割合を占めているのを生徒たちは誇っていた。

さらに、台北高校は日本内地でも入学試験を行っていたために、限られた定員枠に入ろうとして、受験生は在台日本人のみでなく、日本各地から集まってきた。そのため「台湾育ちの我々も、日本的なレベルで選抜されたという証明になる」<sup>17)</sup>という誇りを当時の生徒たちは抱いていたのである。つまり台北高校に進学を遂げる人々は台湾社会において、内地の秀才に負けない台湾の学歴貴族と思われていたのであろう。特に日本人より激しい受験戦争を打ち勝った台湾人生徒達は、台湾人社会の異才と見なされていたといつても過言ではなかろう。

一方台湾で公学校を卒業後、岡山で中学に進み<sup>18)</sup>、東京の私立大学に通った作者張文環自身の学歴は作品主人公の台北高校卒業という学歴に比べ見劣りすることは否めない。身近な物事を小

説の素材にするという張文環の創作傾向から考えると、「台北高校」にこだわることは恐らく意図的に主人公を極端にエリート化して、台湾社会の若いインテリとしての性格を明確に出そうとしたためではあるまい。以下ではこれらの台湾学歴貴族の置かれた社会的文化的な背景と、進学選択の過程で生じた葛藤を具体的な作品を通して考察してみたい。

## 第2節 立身出世を求める青年の前史—「落蓄」

張文環は1927年に公学校を出てから日本に渡っており、これは一人の植民地青年の宗主国へ学問を求める旅の起点であった。1933年に他の台湾留学生と「台湾芸術研究会」を結成し、雑誌『フォルモサ』を発行したのが張文環の最初の文学運動といえる。在京の台湾留学生の団体「台湾芸術研究会」の結成は、台湾にとって画期的な全島的規模の文芸組織である「台湾文芸連盟」の誕生に大きな刺激を与えており、新文学運動の発展において「台湾芸術研究会」はその歴史は短いものの決して見逃せない存在といえる<sup>19)</sup>。『フォルモサ』は三号で停刊しその発行部数も五百部にすぎず同人誌の枠を超えていないものの、台湾人の手による最初の日本語文芸雑誌であり、その後の日本語による台湾文学の黄金時代の到来を予告する役割を果たしたといえよう。この『フォルモサ』創刊号に掲載されたのが張文環の最初の作品「落蓄」であった。

張文環の第一作であるこの作品は、勉強に熱意を抱く貧しい農村青年義山と公学校同窓の恋人秀英との悲恋物語である。経済困難に直面するものの、なお進学に対する熱意が冷めない義山は、東京留学中で帰省してきた親友明仲のもとを訪ねた。お互い抱く悩みを打ち明けて、さらに勉強に励みあうようになる。同時に、恋情と学問との両立しえない現実を見通した秀英は、義山の将来の妨げとならぬように、妊娠した事実を隠して富豪の息子との縁談を受け入れた。秀英にふられたと思い込んだ義山は明仲の援助を受けて東京に向かって行く一方、秀英は妊娠が発覚したため婚約が破棄されて自殺を図る。

興味深いのは、明仲は「小金持の一人息子」であるにもかかわらず、「生きる力も望みも皆失つて仕未つた」という苦悩は義山と共通していた。この二人に共通の苦悩とは一体何のためであろうか。明仲の家庭が没落しつつあること、及び義山は両親が亡くなつてから貧乏に陥ったことから、進路が決められぬために直面した出世の困難さが二人を苦しめていると推定できよう。しかし明仲は「瀬戸内海へ飛び込」む寸前、「死に対する最後の結論を求め」る意図が芽生えたため、心機一転して東京で再び頑張ることにするのである。そんな明仲は恋と進路との両方に苦しむ義山に対し、最初は「田舎でみつちり勉強してくれ…読みたい書物があれば…送つてやる」と励まし、後に一緒に上京することを勧めたのである。ここから「東京留学」が田舎知識人の二人に対して目前の悩みからの脱出となる可能性を提示していることが窺えよう。さらに田舎の秀才である二人と裏腹に、秀英の婚約者Kは「勉強きらい」な人であり、学問としては秀英の方がかえって上位に立っているために秀英と義山から軽蔑されている。ここに当時の若者の間で、学問の有無と勉強の出来不出来が人間の価値を判断する基準となっていることが見出されるであろう。しかし優勢な経済力を具えるKは「大雑貨店の息子」であり、秀英の背負った債務の債権

人でもある。経済力があればこそ娘を幸せにできると秀英の両親が考えたために、秀英は、「公学校出」で、かつ「文学少女」であるにもかかわらず、親孝行と義山の未来のために自己を犠牲にし婚約を受け入れたのである。

学問を通じて将来への道を開こうとして東京留学に大なる憧憬を抱いている義山からは「立身出世を求める台湾青年」の原型を見出すことができよう。またこの作品において青年たちの目に映る農村は「何時も変はらない…単調な風景」であり、脱出すべき場所であるに過ぎない。さらに秀英が義山、明仲と同じく公学校卒業生でありながら、恋人の成功のため自己犠牲をも厭わぬ行為を「東洋の女徳」として意識する点は、張文環の女性観を検討する際には見逃せない。秀英という女性は男性を支える、副次的な存在として登場させられているのではなかろうか。創作初期の習作としても、「落蓄」に端を発する出世するために故郷を離れる青年及び男性を輔佐する女性の造型は注目に値するであろう。

### 第3節 「父の要求」から「土の匂ひ」へ

#### 1. 「父の要求」

1935年9月24日『台灣文芸』に発表されたこの作品は、『フォルモサ』の停刊後に張文環が東京から寄稿したものと思われる。主人公である陳有義は東京の大学を出てから両親の望みとおり高等文官試験を受験後、落込んだ気分を転換するために中野にある母娘二人きりの日本人キリスト教徒の家庭に引越し、その娘の賀津子に恋心を芽生えさせていく一方、同郷の友人に紹介されて左翼の非合法運動に参加して逮捕され、後に台湾に帰って行くという構成の小説である。左翼運動参与に関する描写が張文環小説に出てくるのは「父の要求」のみであり、それ以外には1936年の「部落の元老」<sup>20)</sup>にも「無産者」、「支配者」、「資本家」、「封建制度の残骸」、「奴隸根性」などの言葉を多用した段落が見出されるものの、極めて不自然な構成となっている。ちなみに張文環本人は日本留学期に左翼運動と関与したと推測され、さらに「台灣藝術研究会」の前身である「台灣人サークル」も当時プロレタリア文学運動の流れを汲んだ団体であることが確認できる<sup>21)</sup>ものの、資料が散逸し当事者の証言も求めがたいため、張文環の左翼体験の詳細はいまだに不明である。張文環の左翼体験と、「父の要求」との関わりについては稿を改めて検討したい。

##### (1) エリートとして描かれる台湾青年

「だから私は実を云ふとこの物語の題目を坊ちゃんにでもつけたかつたが、坊ちゃんにしては、金仕ひは餘りに吝々してゐるし、それからと云つて世間を見る目が餘りに邪氣なさすぎて、世の中の苦労がわからない。結局はこれもただ台湾の一人のインテリにすぎないと考えた。」

これは「父の要求」の冒頭で作者自身が作品中に登場して読者に向かい語りかける言葉である。ちなみにこの小説の語り手の視点はつねに主人公と密着し、主人公の心境を代弁する手法を用いているのにもかかわらず、作品の冒頭に作者自身が出てくる点は興味深い。そもそも作品の中で直接読者に話しかける手法を使った作品としては「山茶花」、「芸姫の家」なども例として挙げられるが、戦前に在台の日本人竹村猛が「芸姫の家」のこのような点に対して「不器用な腰

掛」<sup>22)</sup> のような感じと指摘しているように、決して優れた技法とはいえない。しかし逆にこの語りかけから主人公を台湾インテリの代表として描きたいという作者の強い意志が明らかに理解される。この「宣言」から作者が自身と作品中の事物との間にある程度の距離を設け冷静に「台湾インテリの一人」を描こうと努めた点が見てとれるものの、恐らく作者自らと小説に設定した場面とは空間的にも時間的にも密着しているためか、結局冷静な態度も保てなくなり主人公の心境に溶け込んでしまったのであろう<sup>23)</sup>。

前にも触れたが、植民地社会の台湾において台湾人にとっての最高の立身出世は政府機関の役人となることである。第1節で論じたように、台湾の名門校の台北高校卒業生として設定されたエリート陳有義は、両親に期待されるのはまさに判任官以上となり「金モールのきらきらする制服を着てかへる」ことであった。「この子に大金儲けと言つたやうな期待は幼い時から両親は持つてゐなかつた。せめて学問をさせて郡守にでもなつてくれたらこれで老夫婦は安心して死ねるのだ」<sup>24)</sup>。経済的に裕福であることより、社会的な地位を手に入れることができ望まれていたのであった。だから陳有義は両親の願いに従い高等文官の行政科試験を受けることになり、題名とおり「父の要求」を満足させようと努めたが、しかし陳有義の苦悩はまさにここから生じたのである。

## (2) 高等教育機関卒業青年たちの苦悩

### (2) - 1 親の「要求」への裏切り

日本まで出かけ高等教育を受ける台湾青年を経済的に支えているのは、台湾社会にいる親たちである。台湾において一番先に立身出世の価値を見出したのもこの親たちであろう。そして親達が「錦を飾って故郷に帰る」青年を首を長くして待つ姿も容易に想像できよう。ここから青年たちの苦悩が生まれてきた。陳有義は両親の「郡守にでもな」ってほしいという希望の下に、両親の「注文通り」に台北高校を出て東京の大学の自分の志望ではない法科にまで進学した。ところが高等文官試験に合格するのはさほど容易なことではない。1930年まで司法科に合格した台湾人は28人である一方、行政科合格者は7人しかいない。そして日本統治期の50年間にわたって、両者の合格人数を合わせても100人前後と推定されている<sup>25)</sup>。このような激烈な受験戦争に敗れて、陳の進路の道はさえぎられてしまったのだ。ずっと親の「注文通り」に生きてきた陳有義は、親の希望に叶うことができず、結果として、自分に向かいあって自己の存在価値を強く問わざるを得なくなっていく。

実際陳有義は高等文官の行政科試験を受ける前から、合格しても進路の保証はついてこないことを承知している。なぜなら「合格しても採用してくれないから」であり、結局行政科は「務める所がないから」<sup>26)</sup> 司法科合格者と同じく「故郷で弁護士をしてゐる」ことになるのだ。1910年までは公学校さえ卒業すれば通訳や雇員として簡単に政府機関に雇われたが、それも数が限られており、20年代に入ると日本全国に蔓延する就職難の危機までがこれらのインテリにさらにのしかかってきたのである。

### (2) - 2 民族意識の芽生え

「父の要求」で陳有義は自分の賀津子への思いが芽生えたとき、「はじめて心のある台湾の青年の持つ悩みが忘れ得られる」ことを感じた。そしてその愛情が深くなっていくに従い、「この女は民族の問題には十二分なる理解を持つてゐるが、自分の生活と家庭は果たしてこの美しい美的権化を守ることができるか疑はしい……自分の生れ故郷或は自分の民族できへ呪はしくなつて来る」と述べるまでになっていく。この台湾青年の持つ悩みというのは、日本帝国主義への不満など幅広く解釈することもできようが、ここでは若林正丈氏の説を援用したい。台湾青年知識人は「植民地体制下において、その自我形成期に二種類の教育を受け、精神に二つの異なった暗示を受けて」おり、それは「漢族知識人に普遍的な精神の危機であり問題状況」<sup>27)</sup>であった。一方には書房や家庭教育により馴染んだ土著の漢民族文化があり、その背後には科挙を通じて中国で立身出世を遂げる思考モデルが隠されている。もう一方には現代学校教育により浸透してきた支配者側の文化があり、そこには近代日本文化とそれが目標とする西洋近代文化が包摂されている。つまり現代文明への憧憬は日本教育を通して実現できると考えられたのである。しかし、後者を果たすために教育階梯を辿っていく途上では、現実的には「同時に植民地支配の生みだす民族矛盾にも直面し、鋭い精神の緊張を経験」しなければならない。陳有義が抱いたのはまさにこのような台湾青年知識人の根源的な悩みであり、日本留学はこの意味においては彼の「この精神的緊張の解決のための行動である」と理解できる。「この時期台湾知識人の精神の危機とその危機の自覚とが、彼ら自身の近代への目覚め、即ち植民地体制下における近代の地平における自己の発見に根ざ」したものであるという点は看過すべきではないだろう。

陳有義の近代文明への追求は、賀津子との恋によって具現化されるといえよう。賀津子は台湾人作家の初めて描いた日本女性<sup>28)</sup>のようだと思われる。賀津子は「日本音楽学校の高師部を出てからどこへも職に出ず」、しかもピアノを所有する恵まれた境遇にあった。ピアノは文明開化やハイカラな西洋風俗の流行にともない、日本中に普及していった。ピアノを持つことはまさに西洋文明への憧憬の具現化であり、さらに上流社会に属する証明でもある。ピアノの持ち主として賀津子は、陳有義にとってさぞハイカラな女性であったろう。さらに賀津子は、西洋文明受容の最先端の一典型であるクリスチヤンでもある。このような賀津子に陳有義が恋をすることは西洋—現代文明への探求と同様の意味を持つものとはいえないだろうか。

近代文明の象徴である賀津子に惹かれているものの、その魅力を陳有義はかえって「堅苦しいと思はれる」ほど「崇高な美しさ」として認知し、さらに「この女を貰ふ男は自分のやうな柄ではない」と自分に言い聞かせる。さらに賀津子はすでに婚約しており、賀津子の婚約者は作品の中に姿を見せないものの、その影のような存在は二人が結ばれないことを暗示している。この実らぬ恋は「植民地体制下で行われる過程である限り、被植民者としての自己を発見する、悲劇的な自己発見たらざるを得」ないことを、陳有義は深く意識させられたといえる。かくして彼は出獄後、賀津子の好意的な迎えの言葉に対しても、「民族を超越した喜び、そして友情を超越した愛はますます彼に階級的な苦痛を与えてゐた」と感じざるをえなかつた。相手が自分の意中の人であっても宗主国側の人間である限り、被植民者としての自分の気持ちとは永遠に結び合えないというのが彼の「東京の恋」に対して下した結論であるといえるだろう。

出世の見通しが消え、さらに恋も実らぬ、近代大都会の東京で挫折を味わった陳有義は帰郷の道を選択した。しかし、都市生活に馴染んでしまった知識青年にとって、田舎/故郷への回帰とは一体どうな意味を持つのか。そしていったん近代文明の洗礼を浴びてきた彼らの目に、再び映じる故郷の面貌とはどうであったろうか。

### (3) 都市一田舎

「落蓄」の知識青年にとって脱出すべき場所である田舎は、陳有義にとってもやはり退屈な場所を意味する。陳有義は東京で南京虫や不眠症に悩まされつつも「田舎にあるより東京にゐた方が健康のためにはるかにいい」と思い、代わりに陳有義の東京生活は入獄の日々を除けば、モダンな日々を送っていたとして描かれる。そして最後には自ら帰郷の決定を下したのにもかかわらず、いざ田舎に戻ると陳有義は「二、三年しか見なかつた故郷はこんなに迄も変わつてしまつた。田舎の癖に随分神經質に見え…子供まで駄しやれを云ふからおどろいた」と自分の記憶に残った様子と異なる故郷に対し深く違和感を覚え、都市生活の同伴者である賀津子に手紙で不満を述べた。そして田舎での日々は「書物を読む以外に何もする事がない。…毎日手持無沙汰ばかりしてゐる。…人間は静寂と単調に迫められると却つて騒々しい処よりも落付かず…毎日こんな静かな田舎でそはそはしてゐるのが学生の仕事かと思ふと情けなくな」る。都市で活躍したインテリは田舎において無用な人間になってしまうのだ。もはや田舎はこのような都市の洗礼を一度浴びてきた知識人のいるべき場所ではなくなったと陳有義は思っているのだろう。それならば、なぜ陳有義は東京を離れる決定を下したのか。遡れば陳有義は入獄体験を味わった際、同じ「豚箱」に拘留された泥棒にある啓発を受けた。泥棒は財物を盗むために「屋根から屋根を伝わなければなければならない」。法律、道徳觀がある自分達知識人はこのような行為を嫌うはずだが、しかしかえってそれは泥棒が頼って生きていける手段という視点から見直せば、あえて命をかけて屋根に飛びついでいる泥棒の姿は自分よりはるかに生き甲斐を感じさせる。かつて近代化に腐心した陳有義にとって視野に入ることのなかったこのような「生きるための努力」は、進路を見つけられずに帰郷を回避し東京でうろたえている自分と好対照になったのではないか<sup>29)</sup>。さらに左翼運動への従事をやめるようにという要求を綴る父の手紙に一層打たれたため、出獄直後に台湾に戻るようになったのである。

一見「落蓄」の故郷脱出を計る青年と同じく田舎に対してもどかしさを感じているものの、東京で挫折を味わってきた陳の方は下層人民の暮らしぶりに興味を覚えはじめており、そして田舎/故郷で生きるために努力している人々がようやく彼の関心の対象となりえたのではあるまいか。その観察の第一例として、村の場末にいる一人の乞食が挙げられる。この盲目の乞食はつねに丁寧な言葉遣いで村民の間で絶大な人気を博し、皮肉にも普通の人間より裕福な生活をしている。陳は最初「これから先の乞食は歌より敬語」を覚えたほうがまだとこの現象を嘲弄したが、しかし乞食と村民とのやりとりを眺めるうちに、乞食が利益を得たものの、村民たちも彼の言葉から一瞬の喜びを感じとり、日常生活の退屈を紛らわすことができることに気づく。知識人の潔癖症が嫌悪するものこそが実際の田舎生活の実相であり、かつ多くの人間が頼って生きてい

るものなのである。「彼達の話を聞くと情無くなります」と結論づける陳有義は、むしろ自分のインテリ意識及びそれと切り離せない都市や近代文明への憧れが揺らぎつつあるのを感じ、さらにつれこれまで自らの視野に欠落してきた田舎/故郷の原風景への回帰意識を芽生えさせているのであろう。

## 2. 「山茶花」

1940年1月23日から5月14日まで、新鋭中篇創作シリーズ第5篇<sup>30)</sup>として『台湾新民報』に連載されたこの作品は、戦前における張文環唯一の長篇小説である。雑貨店の一人息子である賢は、従妹の娟とは公学校の同級生であるが喧嘩が絶えなかった。一方、活発な娟とは性格が正反対である従姉錦雲は漢文の上達者であり、絵に描いたような古典美人として賢の憧れである。この賢は学校の「女の先生」に近代文明の魅力を魅せられ、さらに両親ないし村全体から出世への期待をかけられている。児童から青年へと成長していくうちに、勉強好きにもかかわらず、進学する機会を失った娟とは対照的に、賢は高等教育を受けるため、RK庄→地方都市R市→台北→東京へと段々進学していく。しかし帝都東京をその頂点とする道をいったん歩み始めれば、いよいよ故郷から遠く離れてゆく宿命に対して、賢は「都会に居れば居るほど、…かへつて田舎にゐたくな」って仕方ないのである。一方、錦雲が親の意思に反逆せぬままに結婚して不幸に陥るのに対し、娟は淑やかな美人への変身を遂げた。娟に心を惹かされついに恋に落ちる賢は、進学とともに近代文明の洗礼を浴びるチャンスに恵まれる一方、近代文明の象徴である都市文化を厳しく批判する傾向が高まってくる。そして賢は台北高校を出て東京に着いて間もなく、故郷で彼の帰りを待ち切れない恋人娟との恋に終止符を打ち、東京留学生活を始める。というところでこの小説は終わる。

### (1) 田舎と都市の図式

「山茶花」の大きなテーマとして、都市と田舎とのはざまにさまよっている賢の心理に注目したい。結論を先述するようになってしまふが、「山茶花」において故郷とはもはや「落葉」や「父の要求」における知識人にとって脱出すべき場所ではない。公学校を卒業するまでの賢は、外界との公共交通は製糖会社の鉄道に頼るしかないRK庄で過していたが、卒業直前の修学旅行で初めて都市を体験する。華やかな島都台北に対する印象は「綺麗」よりも「おどろかされてゐた」と感じており、都市の風景に惹かれたため「自分の庄の駅に降り立つたとき、些かの幻滅の悲哀を感じた」ものの、「自分の庄に落付いたい気持が湧いて都会のことは偉さうに感じるが懐しいとはちつとも思はなかつた」と、修学旅行の結論として賢は呟いたのである。ところで幻滅から安らぎへと気持が変化したきっかけは、駅まで迎えに来た家族の顔を見て懐かしさを感じたためであり、「夕陽は甘蔗畠を朱く染めて、牛車は砂ほこりを立てて庄へかへつて行くところは、凡て昔のまま」だという安心感のためなのである。小説では中学に入る時点からほとんどの時間を都市で過ごしているにもかかわらず、賢の都市における生活は下宿先ぐらいしか描かれていない。さらに、台北高校に進学しても、自分の心境を「都会に居れば居るほど、性格が還されて、

かへつて田舎にゐたくなる」と語る。こうして見ると、賢の田舎/故郷に対する愛着は都市への志向より強そうであるが、しかしそうとも言い切れない。成長にともない精神的な潔癖症と孤独感に囚われる賢は、故郷に対しても不満を抱くようになっていくのだ。

「人のことは人の事と何故人のことを放つといってくれないのでだろう」と賢は強く訴える。この述懐は早口言葉のようやや不自然もあるが、故郷の人の「おせつかい」に煩わされている賢の心境が伺えるであろう。そもそも賢の進路を決めるとき村人がいろいろと口を出したりするように、田舎にいる限り密接な人間関係は避けられない。しかしこのような農業社会に根差す村共同体のあり方は、都会へ進学していくとともに「自由な生活を欲し」がっている賢にとってはまるで厄介な他人の干渉と思われるのだ。そのために、故郷に帰るたび「いろいろ詰らないこと」に惑わされる賢は、「一旦町に出ると闘争心に燃えて、田舎のことは餘り心にこだはらな」くなるのである。密接な人間関係から解放される場所として賢には都市は「気楽のやうに思われた」が、都市 자체を楽しめるわけではない、ということは見取れるのであろう。

上級学校へ進学していくと同時に、賢は学課以外の哲学、欧米文学にも興味を覚え始めた。もともと錦雲姉と中国の昔話や物語を読むことを好んでいた賢は、いつからかトマス・ハーディやゾラ、メリメ、トルストイの作品など「現代的な話」に耽って、生命と存在の意義を追いかけるようになり、ついには昔話を読もうという姉の誘いもいやと断っているのである。近代知識人へと変化するに従い、賢は絶対的な自由を求めてついには人情の網に絡まれる田舎に居られなくなったのであるまいか。近代社会への参入とともに抽象的な思考パターンを身に付けていく青年知識人は、農業共同体である故郷を煩わしい後進的社會と思わざるをえないであろう。

近代都市と田舎/故郷との間にさまよっている賢の複雑な心境を、最もよく語っているのは公学校時代のライバルである従妹の娟が、田舎に永住すると自分の将来がすべて見極められてしまうと感じて「町へ出たくてしようがない」ともらした際、賢が「田舎はいいね。僕は田舎に産まれたことだけが恵まれてゐるやうに思つてゐる。故郷はやつぱり田舎に持つべきだ」と引き止めたエピソードであろう。それは、賢が都市の自由の空気に憧れている一方、自分は都市生活に終始馴染めぬことを意識している結果だといえる。修学旅行の時に「田舎つぱい」として都市の生徒達に冷やされたことは、賢に田舎と都市の差違を感じさせるきっかけとなったのであろう。その後、都市にさえ行けば自由が手に入るという期待は冷めないものの、「いつまで居れば都会の生活に慣れるだろうかと心細くもなる。…買物から風俗習慣に至るまで都会は面倒くさくてならない」という不安も芽生えてきた。しかし、自分の意志にせよ、親や周囲の期待により押し出されるにせよ、賢は上級学校へ進学すると同時に、より大きな都市へ移住せねばならない。社会的上昇移動を果たすと同時に故郷を捨てるという故郷喪失感を味わうのは近代人の宿命なのであろう。

さらに都市へ移住することに対して覚える不安の底流には、賢の大人の世界への反感が作用していると考えてよからう。公学校の仲間達と小川に遊んでいて昼ご飯を食べることすら忘れた少年賢は、母親に捕まえられて強制的に家まで連行された際、自分たち子供の心をわからない大人に対して「今まででは早く大人になりたくてしようがなかつたが、そんな面白くない世界ならしば

らく子供の天地にとどまつて、情勢をみてから大人になつても悪くない」というような思いを抱き、「お化けのやうで興味がな」い大人の世界への反感が芽生えてきた。そして中学受験の直前まで、賢が一層遊びたくて仕方ないのもこのようない子供の世界から離れたくない気持の投影といえよう。

中学進学は立身出世コースの本格的な起点であり、少年時代との別れを告げる起点を意味するのである。親に期待をかけられる以上に、自身も勉強好きの賢にとって、成長とは故郷から離れることとの同義語であり、そのため成人世界への嫌悪感という潜在意識が故郷への愛着すなわち都市への違和感をもたらしたのではないか。さらに娟も賢と同じ、成人世界には入りたくない気持を抱いている。ただ異なるのは、娟の場合は伝統社会が定める女性の役割に対する反発のためという点からである。しかしRK庄にいる限り、歳を取るに従い結婚相手を選ぶ自由は与えられず、「家庭の婦」になることを要求されてくる。成長とは、相手を選べぬままに結婚することを意味するのである。そういう宿命に縛られないために、RK庄から脱出することしか考えられないのである。この点から考えると、賢にとって田舎から離れて行くことを意味する成長=大人世界入りは、反対に娟にとって田舎に縛られ永住することである。二人とも成長そのものを恐れているが、求めるものが全く逆の方向に向かっているといえよう。

賢に対して田舎の愛しさといえば、急速に変容しつつある都市には欠けているもの即ち修学旅行から帰ってきた時に感じた「凡て昔のまま」というところにあり、それは都市体験がもたらした疲れを包容し、癒してくれる心の原風景である。この意味での「昔」は狭義と広義との両方の意味を包摂している。狭義的には過去の子供時代であり、自分は勉強がよくできても一児童として扱われてさほど注目されていなかったために、今のように村の牧童まで賢の「偉さ」に抑えられるようなことはなかった。その過去において常に傲慢な態度で賢を凌いでいた娟は、むしろ今に至っては村全体からエリートとして見なされる賢にとって欠かせない存在であり、そのためには娟の素朴さないしそれに象徴される賢の幼少年時代を失いたくないために、賢は娟に都市文化を浴びさせたくないのであろう。

一方、広義的な「昔」は賢の過去を指すだけでなく、村全体ないし漢族に属する伝統を意味するものである。そもそも賢は母親にずっと田舎に居れば出世できないといわれたのに対して、「都会よりも、田舎婦人の方が教育の有無にかかわらず、古典的な習慣がこびりついてある」ことをもって反論したのである。さらに自分が「一ばんそれになりたい」ものとは他ならぬ田舎娘の花婿であり、それは「桃色の花嫁さんが（結婚式の）翌朝になると台所で甲斐々々しく自分のために働くことを思へば」、それ以上楽しいことはないからである。賢は都市の風俗に慣れないと同時に、「昔」から伝わってきた伝統的生活習慣を守っている田舎に心の安らぎを求めるが、田舎と都市との両方ともがそれぞれ優劣を備えているためどちらにも定住できずに「故郷はやつぱり田舎に持つべきだ」という結論を出したのである。しかし賢の故郷であるRK庄はほんとうに「凡て昔のまま」でいて賢に安らぎを与えることが出来るのであろうか。

上の疑問に答えるには、賢にとって「昔のまま」という憧憬の投射対象として恋の相手とされた娟のことに戻らなければならない。

## (2) 田舎憧憬の投射

公学校時代における娟は気が強くて傲慢であったために、賢に女の子として見なされていなかった。そのかわりに姉の錦雲は学校教育を受けさせてもらえないため国語が片言しかできないが、古典の漢文を愛読し、父親に漢文を教えられて上達したので村中で評判が高く、「懷古的でロマンチック…女の標本のやうに見えて、凡て女性の模範のやうに」賢が憧れを寄せていた。しかし、娟は両親に修学旅行の参加を許されず、そのため公学校を中退してからは徐々に変わっていく。かつて自分とクラスの上位を争つていつも喧嘩するばかりで、「意地つ張りで、気性のはげしい娟」が愛しい「田舎娘」にしか見えなくなるまでの変化は賢の目に、「あんなにまで甲斐々々しく働くやうになつたことはやつぱり娘らしさ」とあると映るのである。さらに賢の母親が体調の悪い時に娟は熱心に手伝いにきて、賢に一層の親近感を与えたのだが、実はこのようなことはかつて錦雲姉の役目であった。娟が賢の理想的な「甲斐々々しく自分のために働く」田舎娘に成長してきたと同時に、賢も結婚してから俗っぽくなつた錦雲姉の昔の姿を今の娟に無意識に重ね合わせていたのではないか。娟は進学するチャンスを与えられなかつたが、意地悪いお転婆から「女の標本」のような娘への変身を遂げた。このような娟に賢は「優しい姉の一面を再現してゐるやう」と好感をもちはじめて恋に落ちるのである。そもそもこの二人が再会したきっかけは賢が久々に故郷に帰つて来た際、田んぼの中で生き生きと働いている娟の姿を見かけて心ときめいた時であった。

しかしこの賢の視点はいったん都市の薰陶を受け、さらに「台北の娘は着かざりはうまいが、…頭は椰子の実みたいに、夫の為に気を配るとか心配するとか、と云つたやうな殊勝なことは考へてゐない」と都市の女性に対して強い不満を抱く男性中心的な目差しでもある。つまり娟は現在の錦雲及び都市の女性の両者との比較においてその美德が賢に見出されるのである。しかし賢の都市女性への不満は彼女らが夫のために力を尽くしていない点から生じており、これも漢族の伝統である良妻賢母的主義をもとにした考え方であるといえよう。さらにつつての錦雲は漢文が読めて古典物語を愛読した古風な美人であったために賢に好感を持たれたのであり、錦雲の地位に取つて替わる娟も賢にとって伝統を守る女性として愛されているといつてもよからう。その意味で娟は賢にとって目前の理想的な恋の相手であるのみならず、楽しい幼年時代とその場所である故郷、及び大昔=漢族の伝統的習慣への賢の愛着を一身に引き受けているのではないであろうか。

自分の直面する都市と田舎との間のアイデンティティ分裂を埋めようとする賢は、幼年時代の思い出を共有する娟に「昔のまま」で自分と付き合うことを望む。しかし「昔のまま」の娟はもはや賢の幻想にしか存在せず、娟もまた田舎の厄介な人間関係から脱出できる将来を夢見ているのである。賢の台北行きに対して、「女は誰でも留守居の寂しさを我慢しなければならない。それに慣れる女はじめて貞節な女になり得る」と自分を慰める娟であるが、実は賢に負けないほど都市へ飛び出したい気持を持ち、都市に自由を求めようとした。その意識の芽生えは早くも公学校の修学旅行への参加を両親に許してもらえないために断念した際に、「大学生と東京に行く女の先生」を羨み、「東京の娘は、女中までして、女子大学を出てゐる」という女先生の話を思

い出して、そして自分も「先生に女中の仕事を見つけてもらへないだろうか」と考えていた。

賢と付き合うようになってからもその気持は絶えることなく、「田舎にゐるのはいや」だから「裁縫か産婆さんを見習ひに行つたやうな形で町に出る」ことを賢に提案して、「そしたら、拘束され」になると娟は考えるのだが、やはり賢に止められる。つまり賢は娟の都市の自由に憧れる気持を無視し、娟に対して「昔のまま」の安らぎを求めている自分の気持を優先させるわけである。この点においても作者は「落蓄」の秀英と同じ境遇に娟を押し込んだのである。賢の未来への企図において、娟の役割は「自分の好きな良妻、自分の片手」という補助的な存在でしかなく、そして賢が大学を卒業するまで待ち切れない娟は、やはりこの未来図から消えねばならぬのではなかろうか。秀英も娟も、男性中心の作者の視点から動かされているに過ぎないといえよう。

現在の娟が昔のままであることはありえないのと同じく、故郷=RK庄も賢の期待を裏切って近代化しているのである。小説の第一章に登場したRK庄は、「町の区劃整理で、流れをよくするため、(賢の家の前にある)小川の縁にコンクリートをつけたのである。これによつて街の下水工事が始められ、街の面目は新たになつたと共に一切の線が幾何学的」になったという言葉で早くもその近代化の趨勢を示しているのだ。賢が憧れていた古典的な結婚は、もはや「凡てが新式に行はれてゐる」「所謂る文明結婚」に取つて替わられた。さらに賢の希望と裏腹に、対外交通は製糖会社線の汽車にのみ頼っていたRK庄にも、K町との間に乗合のバスが開通され、それと同時に資本主義市場への参入も開始しており、近代化への変容はもはや時間の問題であろう。乗合バスの開通に従い、「田舎娘達はすつかり運転手に参つて、ときどき戸口に出てきては、運転手に秋波を送つてゐる。」保守的であったRK庄に変化が生じる点は、女性を通して表現されるのは注目に値するであろう。この点については次節で論じることにする。そういう変化の中に、娟も他の田舎娘と同じように都会的なモダンボーイに憧れているという印象を賢に与えたのである。実際賢は娟に裏切られはしないものの、賢にとって「昔のまま」にあるべきRK庄でも近代化つまり都市化はもはや無視できぬまでに目の前に迫ってきており、そのためRK庄はもう安らぎの故郷ではなくくなってしまう。娟の疑似的裏切事件により、賢が頼りつつある娟+往時+RK庄という三者一体の構図は崩壊のきざしを見せはじめている。

娟に裏切られることで落ち込んだ賢は、RK庄より山の奥にある山茶花部落に行く。そこで自分の将来を「大都会に行くか、それとも農園を經營し、トルストイの小説に出てくるやうな田園生活をして」ゆくことと描き出して、心の傷を癒そうとしている。賢の故郷アイデンティティを再建する試みは、RK庄よりも未開な場所である山茶花の部落で解決の糸口を見出すのである。つまり山の麓にあるRK庄が近代化しつつある兆を見せてからは、もはや賢は都市での疲れを癒せなくなり、そのために賢はもっと山の奥、まだ資本主義に侵入されずに心の原風景が守られているところへ逃げ出さなければならない。それは山茶花が一杯に植わっている部落であり、賢の回帰する場所であった。

そもそも賢は村民たちの期待した医専には進学せずに高校の文科に入る際、村民たちの疑いの眼差しに対して将来は裕福にならなくても構わないという自らの気持ちを「僕は昔僕達（筆者注：賢一家）が辺鄙な部落で暮したと同じやうにやりなほしてもいいのです。」と表現しているの

この言葉は、この「辺鄙な部落」こそ RK 庄の人々に傷つけられた際に回帰できるほんとうの故郷であることを明らかにしているといえよう。実際、賢にとって故郷は現実的な場所として認識されているのではなく、現時点の自分の位置と比較して「昔のまま」という雰囲気を具えたある場所として概念化されているのであろう。近代化の波が台湾全島を巻き込みつつあるのに従い、賢の故郷もついに流動的な色彩を帯びていたのである。

歴史研究者成田龍一は、19世紀後半の文明化と産業化の開始とともに、人々が生地から都市へと移動することにより、「故郷」は都市とのペアの関係で発見され、意識化されたと論じる。そしてこのような都市の中に「自覚化」されている「故郷」は「実体として存在するのではなく、構成され、語られることによってあらわれてくる空間である」<sup>31)</sup>と故郷概念の流動性を明示し、「故郷」の單一性、同一性、均一性を斥ける。

近代知識人としての賢ないし張文環自身にとって、故郷というのは決して RK 庄や梅山という固定的な場所ではなく、むしろ「立つ所の場所に依りて」変わりつつあるものであり、徳富蘆峰の言うところの「唯其人の心に忘れんと欲して忘るゝ能はざる最初の剣刻せられたる処」<sup>32)</sup>なのであろう。張文環の小説には舞台を梅山に設定したと見られるものが多いが<sup>33)</sup>、作者自身が自ら描く場所が梅山であると明示しているのは戦後の『地に這うもの』<sup>34)</sup>のみであることに注目したい。「張文環は故郷＝梅山を好んで描く」という安易な解釈は、彼の作品中の田舎風景の背後に存在する「故郷」アイデンティティの流動性に気づかぬ発言と言えるであろう。確かに張文環は創作の際、身近な人物事物を取り上げ小説の素材として使用しているが、しかし張文環小説＝梅山スケッチという理解にとどまっていては決してその小説を深く理解したことにはならない。

実は張文環のエッセイから想起される梅山とは未開な場所で町とは違い純朴さが溢れる山中の部落<sup>35)</sup>であるが、1930年代以後の梅山では製糖会社線以外のバスも開通し、自動車数が嘉義県においてつねに上位を占める繁栄の町<sup>36)</sup>へと変容していたのである。それにもかかわらずかつての未開発梅山を愛惜する張文環は、むしろ賢と同じく故郷の近代化に抵抗する気持ちにとらわれていたのではないだろうか。賢はすでに自分が求めている場所は恐らく実存しないことを意識しあらためたために、「小説に出てくるやうな田園生活」という架空の枠組みに憑かれているのではないか。すでに都市に移住した小説家張文環にとって、創作とは小説を通して「故郷」を語ることであり、それは自らの現時点の場所の自覚を促すとともに、「昔のまま」を求める行為であるといつても過言ではなかろう。

ところが、大学入学を控えている賢は、結局田園生活ではないもう一つの選択肢を選んでいる。大都会東京へ学問の道を歩み続け、それによって娟への恋愛や故郷アイデンティティなど「一切を捨て」たのだ。しかしそれは果たして賢が期待する通り「飛躍のチャンス」になり得るのだろうか。作者はここで筆を止めたが、この問い合わせへの答えは「父の要求」や後に論じる「地方生活」、「土の匂ひ」で掲示されているのではないか。

### 3. 「地方生活」

「地方生活」は1942年10月の『台湾文学』2巻4号に掲載された。小さい時に両親の親友の

娘である婉仔と婚約していた主人公澤は、東京留学を経て5年ぶりに故郷に帰ってきた。澤はその時点ですでに都市の生活に溶け込んでいたが、就職難に襲われたため帰郷も仕方ない選択であると嘆いていた。しかし澤は地方で生活する時間が長くなればなるほど落ち着いてゆき、さらに婉仔との結婚により心の居場所も見つけることができ、「地方生活」の楽しみを吟味しはじめた。同じ留学生の帰郷をテーマにする「父の要求」とは異なり、全く日本人を登場させない「地方生活」では、意図的に台湾人社会に焦点を当て、民族問題ではなく日本教育を通じて伝統社会に浸透してきた現代文明への反省にテーマを絞っていると考えられる。

### (1) 澤・その家庭

澤の実家は一人息子を東京まで送り出したことから、比較的近代化の波を受け入れた家庭であることが分かる。そもそも澤は父親の「新しい学問をさせ」、「(田舎の人達) に新しい学問を示す」というような考え方にもとづいて大学まで進学したのである。書房で教育を受けて日本語がその常用言語ではないはずだった澤の父が、息子のことを「タク」と呼び捨てている。そして飲み物としてコーヒーが常備されているその家では、植民統治とともに使用されるようになった新暦に従い暮らしている。これらはずっと町で生計を営んでいた商家ならではの風景であろう。澤の東京体験については多くは描かれていないが、過去の「某美術研究所の女留学生」への恋慕や自由な生活に対する憧憬から、澤が田舎では実現できない自由恋愛や近代的生活様式を追求していたことは想像に難くないであろう。東京で五年の留学生活を送った澤は、帰郷したばかりのころには故郷への違和感を感じざるを得なかった。時々都市の風景を思い出しては「都会や港の町が懐かしい」という気持に陥り、そして自分の好みはやはり日本の秋のような「繊細な風景の方」であると考えた。毛糸のセーターや学生服を着用している自分の姿を「貴公子然たる」と称し、それを「夜会のない燕尾服」とも自認しているのは、澤が田舎において座りの悪さを意識しているからである。「都會を切り離して、澤は生活出来るだろうか、彼は都會に勤めて田舎に故郷を持つてゐる誇らしさばかり思つてゐたが、故郷にゐて都會に職を持たない悲しさを考えてみたことはなかつた。」両親や田舎の人々の大きな期待を担い、高等教育を受けてきた澤にとって、都會暮らしと現代的な女性との結婚は自分の将来にふさわしいものであろう。しかし、都會で職を見つけられず現実に追い詰められてのいやおうない帰郷と婉仔との結婚とは彼にとっては親孝行としての義務でもあった。このとき一度は自分にふさわしい居場所を都會（現代文明）に想定した澤が、高等教育を受けても就職ができない現状から、この教育や教育を受けた自分の価値に澤は大きな疑問を抱きはじめるのである。この自己及び現代教育への不信によって生じた真空状態において、全く現代の学校教育を受けたことない、しかも理想の女性として描かれる婉仔と結びつくことは、伝統価値とのめぐり合いを象徴しているといえよう。

澤も部落の人達に「金筋2本」をつける中学の先生になることを期待されていたのである。しかし、「大学を出て、あくせくと職を求めてゐたが、揚句の果ては…故郷にかへつて」きて、故郷の人の冷たさを味わったのちには、学校教育を受けたことのない嫁の婉仔に対し、人間との付き合い方や物事の考え方において深い劣等感を覚えざるを得ないのである。就職難をきっかけに

澤は自分の受けてきた現代教育から男としての自分自身にまで懐疑を抱くようになっていた。澤の場合は、「新しい学問」を受けても田舎の人達に「新しい学問を示す」という父に付与された使命を果たすことができず、かえって田舎の人達（婉仔はその代表の一人）と伝統的な価値に安らぎを与えるのである。

## (2) 婉仔・その家庭

純粋な台湾式の名前が示す通り、婉仔は台湾伝統社会で生まれ育った女性である。この学校教育を受けていない女性は日本語が片言しか話せないものの、漢文の方は澤を凌いでかなり達者である。漢文上手の姉と日本教育を受けた妹という構図は「山茶花」の錦雲・娟姉妹から継承したもの、「地方生活」において婉仔はもはや錦雲を上回り、古風でありながら物事に対し自身の考えを主張する事ができ、個性的であり単に従順なのではなく自分なりのこだわりをもっているのだ。決して無学というわけではなく、相手に応じて人生論等もいろいろと話し合えることから、まさに田舎知識人にとって理想の伴侶といえるだろう。

婉仔の長所を引き出すために、作者は様々な策を施した。まずは婉仔の性格を高等女学校まで卒業して「医者の玉子」と縁を結んだ淑とはまさに正反対の個性にしていることが挙げられるだろう。淑は婉仔の妹にもかかわらず、小さい頃からわがままな性格であって、無駄口が多く、常に澤や婉仔にいやがらせをしていた。淑に対して澤は「かう云ふ現代的な女は案外精神力の乏しい、…健康な体に似はず、享楽を貪ぶり<sup>38)</sup>たい性格」だとして彼女のことを恐れていた。事実彼女は自分の父親の危篤の際に、遺産問題と持参金のことばかり考えてさえもいた。それは台湾社会においては最も許されぬことである。それを見て澤は「これがもし現代の道徳であるならば、次に来るべき社会道徳はどんなものであるか」と嘆いた。ここに「淑=現代的 ⇔ 婉仔=伝統的」という張文環の意図した構図が明らかに見て取れるであろう。

もう一人の対照的な人物は澤である。澤の母親の話によると、「(婉仔は) 山家にて、人間修養ばかりしてゐる、澤とは違つて俗氣がない」とされている。家庭を思い人間関係に気配りする婉仔の姿勢はいつもぼんやりしている澤の性格を極立たせる。婉仔は学校に入れなかつたため国語は苦手であったが、田舎においてはむしろ漢文の方が通用しており、手紙のやり取りにも漢文に頼らなければならない。つまり「地方生活」において、婉仔とそれに代表される伝統的な価値は高等教育をうけた現代人である澤と淑より、遙かに実用的なのである。婉仔の形象を通じて一方的な現代文明への傾斜は批判される。さらに婉仔と澤との縁結びの方法は他ならぬ「指腹為婚」を彷彿とさせる漢族の伝統慣習によることは示唆的であろう。澤はこの婚約を果すことにより「人生に於て一つの峠を越えてきた」ような予感を覚えている。このような婚姻は伝統価値への回帰儀式として見てよかろう。

一方、その婉仔の父親の楊が、全財産を息子の教育に費やした澤の父とは異なり、自分の子供に学校教育をうけさせるより百姓になってほしい、従つて「百姓するには自分の身を修める道徳観念さへあれば、一理通じて万理に徹す…論語だけは覚えさせたい」という信念の抱いていることも見逃せない。婉仔はこのような家庭教育から優れた漢文能力及び澤に比肩できるしかも儒教

的な思弁能力を習得していたのである。アイデンティティの揺らぎの中に置かれた澤とは対照的に、書房→家庭のような非公式的な漢族文化の普及パターンとその教育内容である儒教思想が、優れた価値を具えている点が描き出されているのである。

さらに町から山奥の里に戻って行った楊の行為自体は、一度近代化文明の洗礼を浴びてきた人間があえてそれを捨てて、始原へ回帰するものと見てよかろう。楊は土地と人間との切り離しがたい関係や、人間との付き合いより「自然を相手にして暮らした方は楽だ。土地は人を裏切らない」といったふうな生き方を澤に示している。ここに都会で進路を見つけられず、さらに徐々に「地方生活」と馴染んでいく澤の将来が暗示されているとはいえないだろうか。

ここで張文環の考え方の変化を明らかにさせるため、これまで論じてきた作品の中に出でてきた「現代教育を受けた女性」の形象を顧みたい。「父の要求」の賀津子は陳有義の近代文明に対する追求の象徴である点はすでに論じた。そして「山茶花」において賢のマドンナとして描かれた「女の先生」は、少年賢に近代社会の魅力を教えたのである。賢は小さい頃から勉強ができるため、自分の将来の出世をある程度意識していると考えられるが、立身出世の道の先にある近代文明の匂いを賢に感じさせたのは「鋭敏な、理智的なひらめき」の持ち主として「この村の文化の開拓者」と賢が思ったこの女の先生に違いない。賢にとって「女神の再現」の存在である女の先生が食べさせてくれたドロップケーキの味について賢は「とろとろと舌のうへで甘いいい香しい匂ひがひろがつて、文明と幸福の空気が部屋ぢゅうに溢」るように感じている。そして先生は村の娘達とは違って裾にレースのついた袴などを着用し、ハモニカを吹きながら「大人の世界の一つの社交に必要」とされる歌や「金色夜叉」を賢に教えた。そもそも台湾人女性であるにもかかわらず先生になれることが植民地政府による近代教育制度がもたらした産物であり、その意味でも「女の先生」という身分も近代化の象徴と見てよかろう。女の先生への恋慕に賢の近代社会に対する憧れそのものも包摂されるのではなかろうか。まして女の先生の恋人で後に夫になる人はまさに「角帽をかぶ」っている東京の医専の台湾留学生である。自分にとって手が届かない存在である、しかも文明開化の匂いを漂わしている女の先生を幸せにさせられるのは高等教育を受けた人間であるということは、少年賢に上の学校へ進学し近代化社会へ飛び込む夢を抱かせたと言えるのであろう。しかし、この高等教育卒業者のカップルは「地方生活」においてはかえって虚栄を追う人間に格下げされた。ここに張文環の近代文明に対する考え方の転換が見て取れるのではないか。

とくに「山茶花」において都市文化を批判しようとする際、「ただ着物を綺麗にかざり、頭は時代と別々な生き方をしてゐる」ような「形式を重する…先走りの女」を指摘することにより賢の不満が語られている点は興味深い。そして娟の公学校時代の親友である嬪は、かつて優しくて愛想がよかったために賢は好感を持ったが、女学校への進学を果すと、「貴族的」な態度を見せたりして傲慢な女に変貌した。つまり進学すればするほど近代文明へ接近し、女性の伝統的美德は消滅していく。それに反して田舎娘の錦雲は学校に入らず家庭教育により漢文が達者な古典的美人として描かれる。もう一人の田舎娘の娟は公学校から中退することにより錦雲の形象へと重ね合わされていく。

かつて近代文明の香りを漂わせて憧れを覚えさせられた高学歴の女性は、中身のない虚栄な性格を呈するようになってきた。しかもこの変化は、知識青年が伝統及び郷土への価値回帰するのと同時進行しているのでもある。ここから見出せるのは、知識青年でもあった張文環自身の価値変換ではなかろうか。さらにその変化しつつある価値観は、つねに作品において女性像を通して表現されているのではなかろうか。

つまり、立身出世の道を辿った台湾青年は、かつて恋愛・婚姻を含む個人の自由を求めるため、同じ高等教育卒業者の女性との結びつきを望んだといえるが、田舎/故郷を離れ近代文明へと近づこうとするにしたがい、アイデンティティのゆるみを感じつつやがて伝統の価値を気づき始めている。そしてその象徴としては、恋する相手をハイカラさんから近代教育による「汚染」が少ない田舎娘へと変換したといえよう。とはいえ、植民地統治下の台湾において、近代化、都市化はもはや避けられぬ波であり、「現代/都市」と「伝統/故郷」とは終始対立的なコンセプトでなければならないであろうか。両者の間に介する中庸的な生き方は存在していないだろうか。その答えは、「土の匂ひ」に見出させるかもしれない。

#### 4. 「土の匂ひ」

張文環を含め台湾の若い知識人たちが1941年5月に創刊し、『文芸台湾』とともに台湾文壇における日本語台湾文学の黄金時代に築いた『台湾文学』は、1943年12月発行の最終号4巻1号を以て最期を迎えた。小説「土の匂ひ」はまさに戦争の影が台湾人の生活の隅々までを覆っている暗い雰囲気の中、1944年7月皇民奉公会『台湾文芸』1巻3号に発表されたのである。ただしこのときの張文環はすでに政治、文化の発信地である島都台北を離れて中部の町霧峰に引越していたと推測される。

これまでの主人公たちと同様、台北高校卒業のエリートである吳清輝は、10年近くの歳月を東京で送ったものの長い間失業の泥沼にあえいでいた。狼狽する清輝のもとに「家事上のことでのせひ帰郷せよ」という突然の電報が届いて、清輝の帰郷を催促した。職業も資格もない清輝は、これをきっかけに過去の放浪生活を反省せざるを得ず、「自分の弱さを識」って台湾に帰っていく。田舎故郷に戻った直後、清輝はすでに結婚した中学時代の元恋人に出会い、過去への追憶に耽りここから抜け出す事ができず、結局台北へ職を探しに行くことになる。台北で大商人や記者など様々な類型の人出会い「台湾の宝塚」を目指す珍しい会社に雇われながら、自分のアイデンティティを模索していく。そして最後に彼が辿りついた身を寄せるべき場所とは台北郊外の農園であった。「土の匂ひ」はこのような台湾エリートが農民に変身を遂げる物語である。他の張文環作品とは相違して、「土の匂ひ」には同時代の世相がよく登場する点が示唆的である。大陸の冀察政権問題、ヒットラーとムッソリーニの活躍、二二六事件、大東亜共栄圏、新聞の漢文欄廃止などのほか雑誌『台湾新文学』、『媽祖』などの名が次々と紙面に現れる。そして小説の時代設定は漢文欄の廃止直前、つまり1937年ごろから始まり、太平洋戦争勃発後の1943年前後まで進行していくのである。

### (1) 故郷喪失

清輝は就職難に襲われて帰郷した留学生という意味で、「地方生活」の澤と同じ立場にある。彼らは台湾社会の学歴貴族としてプライドを抱くものの、現実的には生計を営めぬという事実が彼らに打撃を加える。そのために、「自分の生涯」は「一生苦労の多い」というふうに澤は思っていたが、東京で彷徨っていた時間が澤の二倍もあり十年に及んだ清輝の場合には、将来に対する恐怖と自信感なさが一層際立つのである。「これまでの運命との戦ひに…いつも敗北を喫してきた」と思い込んで、自意識の中に自分を不幸な人間だとして想定しているのである。このような未来の見通しがつかない清輝は十年ぶりの帰郷に際し、留守中の故郷の変化に驚かされ、「故郷の山河は別に變つてはゐなかつたが、人情が變つてゐる…素朴を失つて凡てのものがぎすぎすしてゐるやうに見え」たのである。清輝にとって勉強、就職のために都市で過した十年間に、都市にいた自分も後に残した故郷も共に変化してしまい、十年後の現在帰郷した時には、故郷はもはやかつての場所ではなくなっていた。故郷喪失を体験した上に自信も失いかけた清輝は、どうやって自分の居場所をみつけそしてアイデンティティを再建できるのであろうか。

### (2) 幻想からの目覚め

もともと清輝は幻想に耽りやすい性格をしている。彼が提唱する竹紙製造業の改革を考えたのちに台湾の祭典には欠かせない金銀紙を廃止せよという「金銀紙廃止論」、さらに竹の代わりにぶどうを農民に植えさせて葡萄酒を作り、スペインのような葡萄酒名産地をめざす「葡萄酒製造」など奇想天外な論文を書き続ける。しかしやはりこの葡萄酒論文が新聞に載ったおかげで、清輝は同じく奇想天外な会社の投資家に注目されて雇われるようになった。それは台北郊外の北投に土地を買収し生姜を植え、その農産物と製品を満州や朝鮮に輸出するか温泉旅館を建てるかして、これによってもうけたお金で宝塚歌劇のような事業を興して「台湾の小林一三的な商売」を目指し、成功したらさらに南方へ進出して、「大東亜共栄圏の途びらきの役をつとめよう」という大きな野望を持っている会社である。さすがの清輝もこの話は大げさすぎると不信感を持ち、予想したとおり会社が水泡のように消えようとする時に、清輝はこの形だけの会社を離れようと考える。これは清輝が非現実的な自分との別れだとすれば、目覚めた後の彼は、姉と親友の謙とが共同出資で購入した台北郊外の草山にある土地に「自給自足」の農園を築き上げようすることなのであった。

前にも触れたが、張文環が描いた台湾エリートの共通点といえば、名門校台北高校の卒業生である。さらにもう一点を付き加えたい。それは、主人公がみな例外なく一人息子であること。子孫の繁栄を重視する漢族社会の台湾において、これは決して一般的な現象ではあるまい。作者が一人息子にこだわるのは、兄弟など並行的な関係を排除して、その家庭内の葛藤を親子という直系的しかも上下的関係に絞り、近代化コースを辿りつつある植民地台湾に生じる家族制度の変容、及び伝統と現代文明のはざまに進路を模索している青年の心理状態を、家業継承という責任を背負わせられる息子の彷徨を通じて現そうとする意図を抱いていたためではあるまいか。これを最も明らかにしたのは、清輝の場合には節姉という姉のほかに夭折した兄がいた点である。つ

まりもともと次男であった清輝は、兄の死亡により長男となって家を継承する責任を負わされたのである。意外にも引き受けることになったこの責任は次男として育ってきた清輝に、陰性的な特質をもたらし、ついに家族制度に馴染めぬ疎外感を覚えさせ孤独を強いた。東京十年間の放浪もこのような束縛からの解放を求める気持によるもと見てよかろう。しかし「家事のこと」即ち両親の経済状況の悪化が、清輝に過去のわがままな生活を省みることを迫るのである。

帰郷して故郷喪失に直面した清輝に、伝統的家族の価値を正面から教えるのは故郷における実家でなく、台北へ嫁いだ姉の婚家である。一家の主人であった節の舅と夫が相続いで亡くなつたにもかかわらず、自分と同じく長男の位置にある謙の努力によって、この家庭は潰れることなく、かえって活氣があふれる温暖な様相を呈している。清輝は一家団欒の夕飯に加わってから「この老人を中心にして孝養をつくしている様は美しい」という感想をもらし、そして自分の家庭のことを考えはじめる。義理の兄の死去を悲しみつつある清輝は、早くも立ち直った明るい鄭家の成員と比べて自分の消沈しがちな僻んだ性格を意識し始めていたのではなかろうか。そしてこのような家庭意識が芽生えた清輝は正月に再び故郷に帰った際、以前の「ぎすぎす」とした気持と裏腹に、田舎の景物を「散髪の後の気の軽さ」のような目差しで眺めて、「山川草木はひとしく自然の恵みをうけて、万古の生をたたへてゐる。何故に一人の人間が日夜人にも喰ひつきまじい悩みと怒りに悶え苦しむ必要があらうか。どうして自分は百姓をしなかつたかと、むしろ後悔の沸くほど彼は故郷の風物を愛してゐた」と田舎の美を再認識する。この時点で清輝はようやくかつて自分を苦しめた僻みと訣別ができる、さらにこれから進路は田舎への回帰にあるとの意識を抱いたのであろう。

### (3) 自力で築き上げる「故郷」

清輝は島都台北で文化関係の職を見つけようとしたが、結局「台灣宝塚」、古本屋業を経てから都市近郊の農園に落ち着いた。一見するとエリートの彼には相応しい結論とはいえないが、そこでは植民地時代に、社会地位の上昇移動を求めて学問に専念した青年たちが最後に辿りついた、始原の価値への回帰過程が示されているといえよう。そもそも「地方生活」の澤は婉仔との結婚により郷土の伝統価値とにめぐりあったが、やはり思考が実践に先行しており、結局は婉仔の加わった家庭生活を楽しみながら、「仏蘭西語」を習って就職のチャンスを待っている時点で小説は終わってしまった。このような澤に対し、清輝は自分の価値回帰を具体化させて、土地と一体化できる農園経営に没頭することを決めた。しかもこの農園とは単なる田舎ではなく、清輝が自分の意志で建設可能なものであり、これから出発していく場所でもある。清輝は農園に古典音楽を流すことにより「農園で催して音楽会」という奇妙な場が生じ、伝統的な場所に近代文明の息吹が吹き込まれたのである。そのために農園は必ずしも近代と逆行するのではなく、むしろ伝統と近代との両者を共に内に潜ませた知識人にとって安住の場所になるのではなかろうか。ここは商人や投機者に占拠される都市よりも、反って知識人の求める完全な自由を得られる場所なのではあるまいか。

さらに清輝の農園はふるさとにあるのではなく台北近郊に位置していることも重要である。と

いうのは「自分の故郷で百姓をすると、息子を留学までさせた親としての体面にかかはるが、ここでは、そんな心配も要らない」事情があり、それによって田舎のおせつかいな人々からも独立できると同時に土地との親しみも達成できる。清輝は種子を蒔く過程から「その伸びて行く植物の力は、人間を生かす力でもあり、大自然の生への執着でもある。」と生命の喜びを教えられ、さらに「毎朝新しい一日を迎へる」勇気までが与えられた。「父の要求」で陳有義が追い求めた「人間としての生甲斐」とは、農園で目覚める朝に清輝が「陽光が木々のうへでかがやいてるのを見る…脳裡を洗はれたやうな生甲斐」として具体化されるのであろう。自分の居場所を見失った台湾インテリは、土地への接近により自信を取り戻すことに成功した。そしてアイデンティティの帰着する先は、記憶に残された「昔のまま」である場所=ふるさとではなく、自己を解放させられる新たな場所未来の「故郷」であり、その建設によってこそ安らぎがもたらされるのであったろう。

#### (4) 現代と伝統との対立を開拓する節姉

「近代学校教育を受けた女性」対「漢文教育を受けた女性」という張文環小説に常用されてきた図式は、「土の匂ひ」に至ると、節姉によって終結を迎える。これまでつねに男主人公の恋人や憧れる対象として登場する女性は、形を変えて男主人公清輝を俯瞰する姉として描かれる。この節姉は女学校三年まで進学しており、植民地の女性としてかなりの高等教育を受けた者と見なしてよからう。その後に「毎夜、父から四書五経ををしてもらつたりした故か、すつかり家庭的な娘になり古典的美人の特質も見えるに至った。このような漢族と日本との両者の教育をうけた節姉は「国文も漢文も達者で」であり、父親の事業の会計などを助ける一方、死生に関する人生観まで堂々と議論する事ができる。性格から言えば、現代と伝統との両者の長所を取り入れた節姉は、その両者の調和の象徴ともいえよう。そもそも彼女が田舎から都会台北へ嫁入りしたこと、両者の融合のための媒介と作者が用意したのであろう。

作者は理想の女性像を節に寄せたが、男主人公清輝にとって節はあくまでも姉であって恋愛の対象とはなりえず、むしろ指導的地位に立っている。これは理想はあくまでも理想であることを張文環が認識した結果といえよう。節のような現代文明と伝統文化とを巧みに調和できる女性は、やはり理想の中にしか存在していないという張文環の溜息がかすかに聞こえてくるようでもある。

「土の匂ひ」は題名通り、立身出世の道から転向し、土地を通じて生命の真義を得するという物語であり、これは台湾インテリが目指したアイデンティティ確立過程の終着点と見てよからう。作者は近代と伝統文化のはざまに彷徨っている知識人読者に、その両者を融和させることの可能性を提示している。この作品はインテリ描写や女性描写のいずれにおいても、立身出世シリーズの終結として位置付けられるべきであろう。

### 第4節 張文環の場合

1938年に11年間の日本留学生活を終え台湾に戻った張文環は、1944年までの間に戦時下の

台北文化界において大きな活躍を見せていました。そして1944年に霧峰へ転居し、3月2日に発表した文章で「私は今農園をやつている」<sup>39)</sup>と述べた。都市から離れた張文環も清輝のように自力による農園建設を実践したかどうかことはさておいて、少なくとも張はその土の匂いを自分の体で嗅いで土地と生命の素晴らしい見出したのではないか。これまで論じてきた立身出世シリーズ以外に、台湾農村の平凡なる小人物とその周辺を描く「部落の元老」(1936)、「豚のお産」(1937)、「二人の花嫁」(1938)、「辣堇の壺」(1940)、「部落の惨劇」(1941)、「論語と鶏」(1941)、「夜猿」(1942)、「閨鶏」(1942)、「媳婦」(1943)などの作品は、「山茶花」の賢が憧れる「トルストイの小説に出てくるやうな田園生活」を自分の創作において実現させようとする張文環の試みと見ることはできないであろうか。実際張文環自身は実家の遺産相続問題に煩われ、紛争から脱出するために相続権を自主的に放棄し、人情の冷淡なる故郷に失望して梅山から去っていた。こうして張文環は梅山とほとんど縁を切ってしまったのである。さらに梅山を訪ねた息子に「故郷の人は利益を貪るが、台中<sup>40)</sup>ではちゃんと根を生やせる」<sup>41)</sup>と元故郷梅山に対する不満をもらした。

故郷を喪失した張文環は台北にいた頃には小説の創作<sup>42)</sup>を通して故郷=田舎を語ることにより、現時点の場（台北）と相対するアイデンティティ対象としての故郷を築いた。そして後には新たに転居した霧峰・台中に新故郷を建てるのであった。従来張文環文学の評価は主に田舎描写をめぐって行われてきたため、知識人を主人公とする作品は見落とされてきた。しかし、実際は台湾インテリを中心とした作品は、張文環全作品においてかなりの比重を占めるうえに、彼の多くの作品を解読する際のカギをも握っているといってよかろう。現代文明、立身出世への憧憬から郷土への価値回帰、この植民地台湾青年の心境転換は、張文環自身の歩んだ道でもあった一方、張はこのような屈折な過程を女性像を通して作品に表現した。すなわち張文環の女性描写は象徴的な機能を持っている。さらに本稿に取り上げなかった田舎/故郷を背景とした作品群の創作意図は、従来思われがちな台湾の生活や風俗を記録しようとするのより大幅に超えるものであるかもしれない。この問題意識をもって張文環作品を全般的に検証したい。

### 注

- 1) 本稿は2000年5月19日東方学会主催の第45回「国際東方学者会議」における口頭発表稿「現代憧憬と価値回帰」をもとにして、これに大幅に加筆したものである。
- 2) 前衛出版社、1991年初版。
- 3) 葉石濤『台灣文學史綱』・高雄文學界雜誌社・1987。但し、本稿では中島利郎、澤井律之訳『台灣文學史』・研文出版・2000, p. 69により引用。
- 4) 『台灣文學』2巻2号・1942/3/30, p. 98.
- 5) 張文環「平林彪吾の思ひ出」・『台灣日々新報』・1940/4/13。
- 6) 劉捷「張文環兄與我」・『滾地郎』・台灣鴻儒堂、1976・p. 311。
- 7) 垂水千恵「『糞realism』論争之背景—与『人民文庫』批判之關係為中心」・「葉石濤及其同時代作家文学國際學術研討会」配布論文 pp. 1-13, 引用箇所は p. 12・2001/12/8-9・高雄中正文化中心・主催：行政院文化建設委員会。
- 8) 游勝冠「台灣命運の深情凝視—論張文環的小説及其芸術」・「台灣文學研討会」配布論文 pp. 1-25, 引

用箇所は pp.. 4-5・1995/11/4-5・私立淡水工商管理学院（当時）・主催：同台湾文学研究室。

- 9) 戦前日本の行政制度である官吏制は、勅任官、奏任官、判任官の三級制である。それぞれの資格と任命過程及び終戦直前まで台湾総督府の各級官吏における台湾人の比例（吳文星『日拵時期台灣領導階層之研究』・台灣正中書局・1992, p. 203 による）を整理した結果は下表のよう：

	資格と任命過程	台灣人／總人數
勅任官	天皇みずから任命	1 / 16
奏任官	高等文官試験の合格者から選び、総理大臣が天皇に上奏して任命	29 / 2,120
判任官	普通文官試験の合格者から選び、各省大臣が総理大臣を経て上奏して任命	3,726 / 21,198

なお、台湾人奏任官の中に、行政、司法高等官吏及び教師、校長、公立病院院長を含む。判任官は主に公学校教師である。

- 10) 伊藤潔『台灣』・中央公論新社・1993, p. 115.
- 11) 『台灣省 51 年來統計摘要』・1946, pp.. 1245-1246, 『韓國と台灣の教育開発』・アジア経済研究所・1972, pp.. 284-285 から引用。
- 12) 順香吟「台灣文學の成立・序説－社會史的考察（1895—1945）」・東京大学大学院地域文化研究科修士論文・1996, pp.. 8-9.
- 13) 吳文星『日拵時期台灣領導階層之研究』・台灣正中書局・1992, p. 140.
- 14) 『嘉義県志一』・頼子清、頼明初など編・1976, p. 79.
- 15) 設立された当時は「台灣総督府高等学校」という名称で、1927 年 5 月に改称。
- 16) 東日出男「台北高等学校と台北帝大予科と」・『芝蘭 台北帝国大学予科創立 50 周年記念誌』・同編集委員会・1994, pp.. 78-79.
- 17) 「座談会 I 獅子頭山に雲乱れ」『台北高等学校 1922-1946』・蕉葉会（非売品）・1970, p. 27.
- 18) その詳細は未だ不明。
- 19) 河原功『台灣新文學運動の展開』・研文出版・1997, p. 202.
- 20) 『台灣文芸』3 卷 4, 5 合併号・1936/4/20.
- 21) 『左連研究』5・1999/10/1, pp.. 31-46 に所収下村作次郎の「台灣藝術研究会の結成—『フォルモサ』の創刊まで」という論文は今の段階において最も詳しい研究といえる。
- 22) 竹村猛「作家とその素質」・『台灣文學』2 卷 4 号・1942/10, p. 22.  
そもそもこの小説はつねに張文環の自伝的な要素が含まれると指摘される。（野間信幸「張文環の東京生活と『父の要求』」『野草』54・1994, p. 42, 53.）
- 23) 中島利郎「作品解説」『日本統治期台灣文學 台湾人作家作品集一張文環』・綠蔭書房・1999, p. 338).
- 24) 1921 年 2 月総督府が頒布した「台灣総督府州理事官特別任用令」により、一定な資格を持ちざらに台湾事情に熟知の台湾人であれば、地方理事官すなわち郡守など奏任官以上の高等文官を担当することが可能。しかし、そういう条件を満たす人選は充分いるにもかかわらず、初めての台湾人郡守の任命は 5 年後遅れの 1926 年であった。
- 25) 吳文星：前掲書, 1992, p. 121.
- 26) 原文ママ。
- 27) 若林正文『台灣抗日運動史研究』・1983・研文出版。引用箇所は pp.. 198-199, 以下同じ。
- 28) 中島利郎「作品解説」『日本統治期台灣文學 台湾人作家作品集一張文環』・綠蔭書房・1999, p. 338.
- 29) 野間信幸氏は、陳有義が泥棒より得た啓発とは自分の「信奉してきた思想が、社会の一面だけをとらえていたにすぎず」、そして階級意識の無力さを見出したとしている（「張文環の東京生活と『父の要求』」『野草』54・1994, p. 56）確かに陳は左翼運動に参加したが、小説全体の比重から見れば「信奉」とまではいえないと思われる。陳が自省するのはむしろ永く都市に生息することにより、下層人民の暮らしぶりに麻痺してしまった自分の感覚ではないだろうか。

- 30) 同じくシリーズには翁闊「港のある町」、王昶雄「淡水河の漣」、呂赫若「季節図鑑」、龍瑛宗「趙婦人の戯画」、陳垂映「鳳凰花」、中山ちゑ「水鬼」など全九篇があるという。黃得時・「輓近の台灣文學運動史」・『台灣文学』2巻4号・1942/10/19, p. 7.
- 31) 成田龍一『「故郷」という物語』、吉川弘文館・1998, p. 14.
- 32) 徳富蘇峰「故郷」・『国民之友』84・1890, 成田前掲書p. 15から引用.
- 33) 「山茶花」、「闇鶏」、「地方生活」、「地に這うもの」.
- 34) 日本現代文化社・1975/9/15.
- 35) 「公学校の思ひ出」・『興南新聞』・1943/4/4, 「茨の道は続く」・『興南新聞』・1943/8/16, 「私の文学する心」・『台灣時報』9月号・1943/9/15.
- 36) 新高製糖株式会社に所属、昭和10年に同社の鉄道は大日本製糖株式会社に併合される.
- 37) 『嘉義郡概況一』・嘉義郡役所編・昭和5年版, p. 38, 8年版p. 40, 10年版p. 42, 11年版p. 48.
- 38) 原文ママ.
- 39) 「高級娛樂の停止」・『興南新聞』・1944/3/2.
- 40) 1956年ごろから、張文環は台中に住居を設け、その遺族は今でも同じ場所に住んでいる。
- 41) 原文：「故郷人重利、台中照様可以生根」、「張文環小傳・張文環長子張孝宗訪談記録」・『台中県文学発展史田野調査報告書』・台湾台中県立文化中心・1993/6, p. 217.
- 42) 本稿で取り上げた「山茶花」、「地方生活」、「土の匂ひ」、及び農村を舞台とした「辣堇の壺」(『台灣藝術』2・1940), 「部落の慘劇」(『台灣時報』260, 1941), 「論語と鶏」(『台灣文学』1巻2号, 1941), 「夜猿」(『台灣文学』2巻1号, 1942), 「闇鶏」(『台灣文学』2巻3号・1942), 「媳婦」(『婦人画報』37巻8号・1943/8. のちには『台灣小説集』・大木書房・1943に所収) などがあげられる.